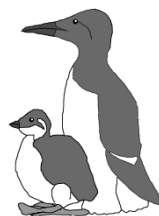


北の海鳥 四号



北海道海鳥保全研究会
会報誌『北の海鳥』
第四号
2017年2月28日発行



1950年代の天売島赤岩対岸のウミガラス繁殖地 村田英二 撮影

目次

1. 北海道周辺の海鳥繁殖地

- | | | |
|--------|------|---|
| ・釧路の海鳥 | 矢萩樹 | 2 |
| ・飛島の海鳥 | 長谷部真 | 6 |

2. 海鳥ニュース

- | | | |
|------------------------|------|----|
| ・カリフォルニアの海鳥 | 先崎理之 | 12 |
| ・1950年代の天売島(2)赤岩のウミガラス | 村田英二 | 18 |
| ・岩手県大槌湾におけるウミスズメの観察 | 伊藤元裕 | 28 |

3. お知らせ

- | | | |
|--------------|--|----|
| ・助成金、卒業論文の紹介 | | 30 |
|--------------|--|----|

1. 活動報告

・釧路海岸海鳥調査 2016

矢萩樹 当会道東地区担当

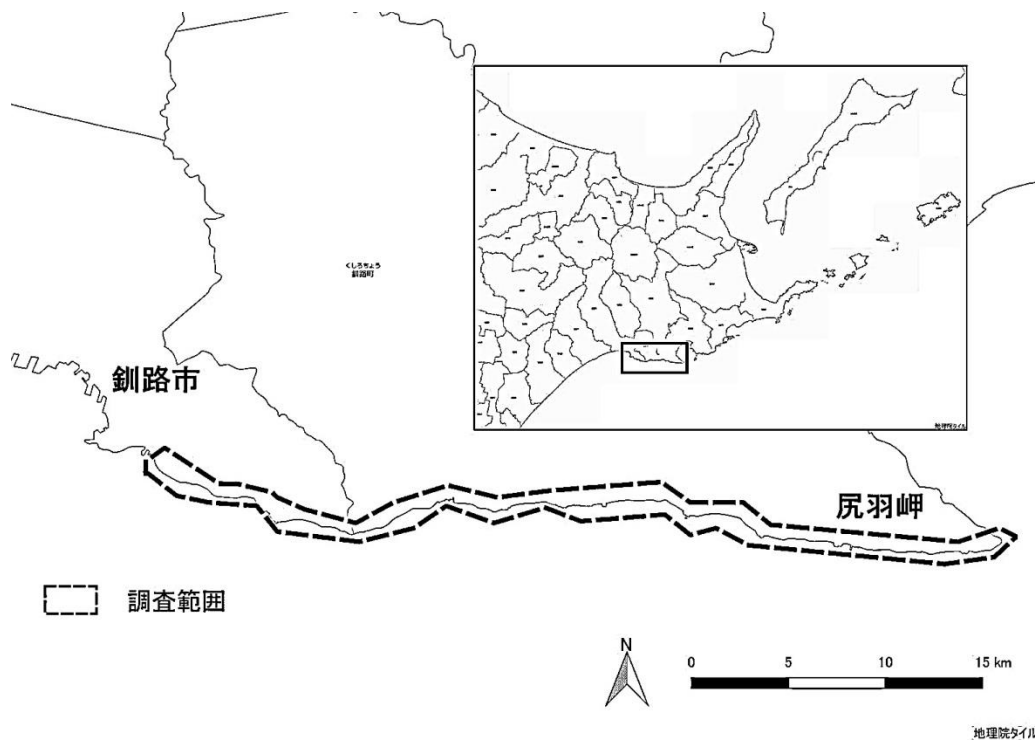
■はじめに

北海道東部太平洋沿岸（以降、道東）には、コシジロウミツバメの国内最大のコロニーが存在する大黒島やエトピリカの国内唯一の繁殖地であるユルリ・モユルリ島など、国内でも重要な海鳥繁殖地が数多く存在します。このようなサイトでは、環境省のモニタリング 1000 事業や地元 NPO 団体の活動によって、海鳥の継続的な調査や保護活動が実施されています。一方で、釧路市東部から根室半島にかけての海岸線には、海鳥の繁殖に適した崖や岩が存在しますが、当地域では NPO 法人エトピリカ基金による浜中町での調査を除いて、継続的な調査は実施されていません。そのため、主要な海鳥繁殖地における繁殖状況は把握されているものの、その他の地域ではどの

ような種がどこで、どれくらい繁殖しているのかは明らかにされていない部分があります。

さらに、1990 年代以降には、北海道では普通種であるオオセグロカモメの繁殖が道東地域を中心に激減していたり、ウ類やカモメ類が新たに港湾施設で繁殖を始めたりと、希少種以外の海鳥類の動向にも注目していく必要性が高まっています。

北海道の海鳥の保全に向けては、このような潜在的な海鳥繁殖地や希少種以外の海鳥類の繁殖状況を把握し、保全に必要な基礎資料を蓄積していくことも重要であり、これは北海道海鳥保全研究会の活動目的の 1 つでもあります。そこで、2016 年は筆者が 2014 年から調査を行ってきた釧路市東部に加え、隣町の釧路町尻羽岬にかけての海岸線で海鳥の繁殖状況を調査しましたので、本稿ではその結果について報告いたします（地図）。



地図. 調査対象地域

■海岸線での繁殖調査

まずは、釧路市と釧路町の海岸線で海鳥の繁殖状況を調査しました。釧路市での調査は筆者が行いましたが、釧路町での調査には釧路市立博物館の貞國利夫氏にも協力いただいて実施しました。

釧路市での調査は、2016年6月28日および30日に行いました。釧路市では東部に断崖が続いており、2014年、2015年にウミウとオオセグロカモメの繁殖を確認しています。また、1970年代にはケイマフリも繁殖していたようです（橋本1979）。2014年の調査以降、ケイマフリ

がいないか注意して観察していますが、繁殖の確認はできていません。調査では、海岸を良く見渡せる地点から、崖や岩を双眼鏡と望遠鏡で観察して、海鳥の巣を数えました。

2016年の調査でも、ケイマフリは確認できませんでしたが、ウミウ40つがいとオオセグロカモメ25つがいの繁殖を確認しました（図1、2）。どちらの種も人目につきやすい漁港近くの崖や岩で繁殖しています。繁殖数は3年間で大きな変動はなく、毎年同程度が安定的に繁殖しているようです。



図1. 釧路市でのウミウの繁殖地



図2. 釧路市でのオオセグロカモメの繁殖地

北の海鳥 4号

釧路町での調査は2016年7月11日と12日に貞國氏と筆者の2人で行いました。筆者が釧路町で調査を行うのは初めてですが、過去にはウミウとオオセグロカモメの繁殖が確認されていました（Osa & Watanuki 2002）。調査では、尻羽岬にかけての海岸線で、釧路市での調査と同様に海岸を良く見渡せる地点から崖や岩を観察して海鳥の巣を数えました。当地域の海岸には、高さ50メートル以上の断崖が続いていますが、ところどころに谷部が存在し、そこには跡永賀、老若舞、知方学（アトエカ、オシャマップ、チポマナイ）など、難読な地名が付けられた小規模な集落が形成されています。アクセスの都合上から、調査のほとんどは、このような集落部から行いました。

調査の結果、ウミウ 77 つがいとオオセグロカモメ 7 つがいの繁殖を確認しました。ウミウは海岸の崖や孤立岩で繁殖しており、様々なステージのヒナが確認されました（図3）。また、1ヶ所の繁殖地ではオジロワシの襲撃が確認され、巣立ち前と思われる複数のヒナが、オジロワシに驚いて海上に飛び降りるのも観察されました。オジロワシによる海鳥への影響は、道東の多くの海鳥繁殖地で確認されていますが、今回の調査地のような小規模な海鳥繁殖地でもすでに起きているようです。オオセグロカモメは、海岸の孤立岩で1つがいと漁港の建物の屋根で6つがいを確認されました（図4）。1996年には、136つがいの繁殖が釧路町で確認されていましたが（Osa & Watanuki 2002）、そこから繁殖数を大きく減少させていることがわかりました。北海道の海鳥繁殖地の多くで、オオセグロカモメの繁殖数が減少していることが報告されています。対照的に、防波堤や建物の屋根といった人工物での繁殖数が増加してい

ます。さらに、本種は単独でも営巣するので、まだまだ把握されていない繁殖地があることも予想されます。オオセグロカモメに関しては、人工物や小規模な繁殖地での繁殖状況を把握していくことが必要でしょう。

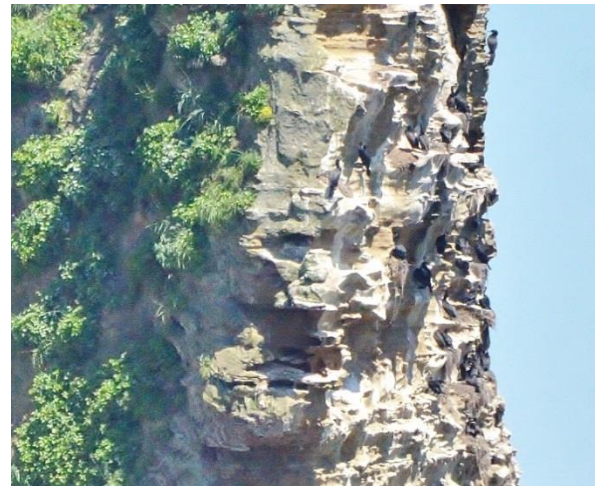


図3. 釧路町でのウミウの繁殖地



図4. 昆布森漁港の屋根で繁殖するオオセグロカモメ

■尻羽岬でのコシジロウミツバメの調査

釧路市立博物館（1985）によるとコシジロウミツバメの繁殖地について「大黒島に数十万羽生息し、そのほか霧多布島や釧路町尻羽岬でも繁殖する」とされていますが、このほかに尻羽岬におけるコシジロウミツバメの繁殖に関する情報は筆者の知る限りありません。そこで、コシジロウミツ

バメの繁殖を確かめるために、2016年7月11日の日中に巣穴の探索と夜間に定点調査を実施して飛来状況を観察しました。

その結果、夜間の定点調査でコシジロウミツバメの飛来や鳴き声は確認できましたが、巣穴を見つけることはできず、繁殖の手掛かりは得られませんでした。コシジロウミツバメは繁殖地以外にも飛来することが知られており、霧多布島やユルリ島などでも繁殖は確認されていませんが飛来しています。おそらく尻羽岬でも繁殖はしておらず、単に飛来する個体がいるだけではないかと思われます。特に、国内最大の繁殖地である大黒島が近いため、その数も多いことが予想されます。

■尻羽岬での定点調査

尻羽岬では7月11日と7月12日の日中に定点調査を行い、海鳥が繁殖していないかを観察しました。尻羽岬沖に位置する大黒島では、過去にケイマフリの繁殖が確認されていましたが、環境省によるモニタリング1000海鳥調査では繁殖の確認はされていません（生物多様性センター2010, 2013, 2016）。ただ、繁殖期にケイマフリの姿が観察されていることもあり（生物多様性センター2016）、ひょっとすると大黒島の近くでケイマフリが繁殖しているのではないかと考えていました。そこで今回は、筆者が繁殖地の候補のひとつと考えていた尻羽岬で調査を行ってみました。

残念ながらケイマフリの姿は確認できず、その他の海鳥の繁殖も確認できませんでした。ただ、沖合と岬付近を往復しているウミウの姿が観察され、陸上から観察できない死角部分で繁殖している可能性が考えられました。海鳥の繁殖は確認できませんでしたが、岬の沖合ではオオミズナギドリと

カモメ類（おそらく全てウミネコとオオセグロカモメ）、ウトウから成る鳥山が観察され、カマイルカ約200頭とともに採食していたようです。厚岸湾は海鳥にとって重要な採食海域なのでしょう。

■今後の展望

今回の調査は、全て陸上から行ったため観察できない死角部分がまだまだ存在します。このようなところで海鳥が繁殖している可能性もあります。できれば、海上からの調査を行い、より詳細な情報を確認したいところです。

■引用文献

- 橋本正雄（1979）ゴメの話。釧路市，釧路。
- 釧路市立博物館（1985）釧路市立博物館解説シリーズ9。釧路市立博物館，釧路。
- Osa, Y. & Watanuki, Y. (2002) Status of Seabirds Breeding in Hokkaido. Journal of the Yamashina Institute for Ornithology **33**(1):107-141. Yamashina Institute for Ornithology.
- 生物多様性センター（2010）平成21年度重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト1000）海鳥調査業務報告書。環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田。
- 生物多様性センター（2013）平成24年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書。環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田。
- 生物多様性センター（2016）平成27年度モニタリングサイト1000海鳥調査報告書。環境省自然環境局生物多様性センター，富士吉田。

・飛島のカンムリウミスズメ

長谷部真 当代表

■飛島への道

ぼくが 2013 年に北海道海鳥センターで自然保護専門員をしていたときのお話です。北海道大学の大学院生である先崎理之さん（当会事務局長）はその頃国内のケイ

マフリの繁殖地を調べて、論文にまとめようとしていました。ぼくはたまたま調べていた文献で山形県酒田市にある飛島（図1）にケイマフリがいたという情報を見つけました。ある人からの情報で「ケイマフリは繁殖していないが、ウミスズメが5月の連休ころにいるから、ウミスズメが繁殖しているかもしれない」と教えてもらいました。

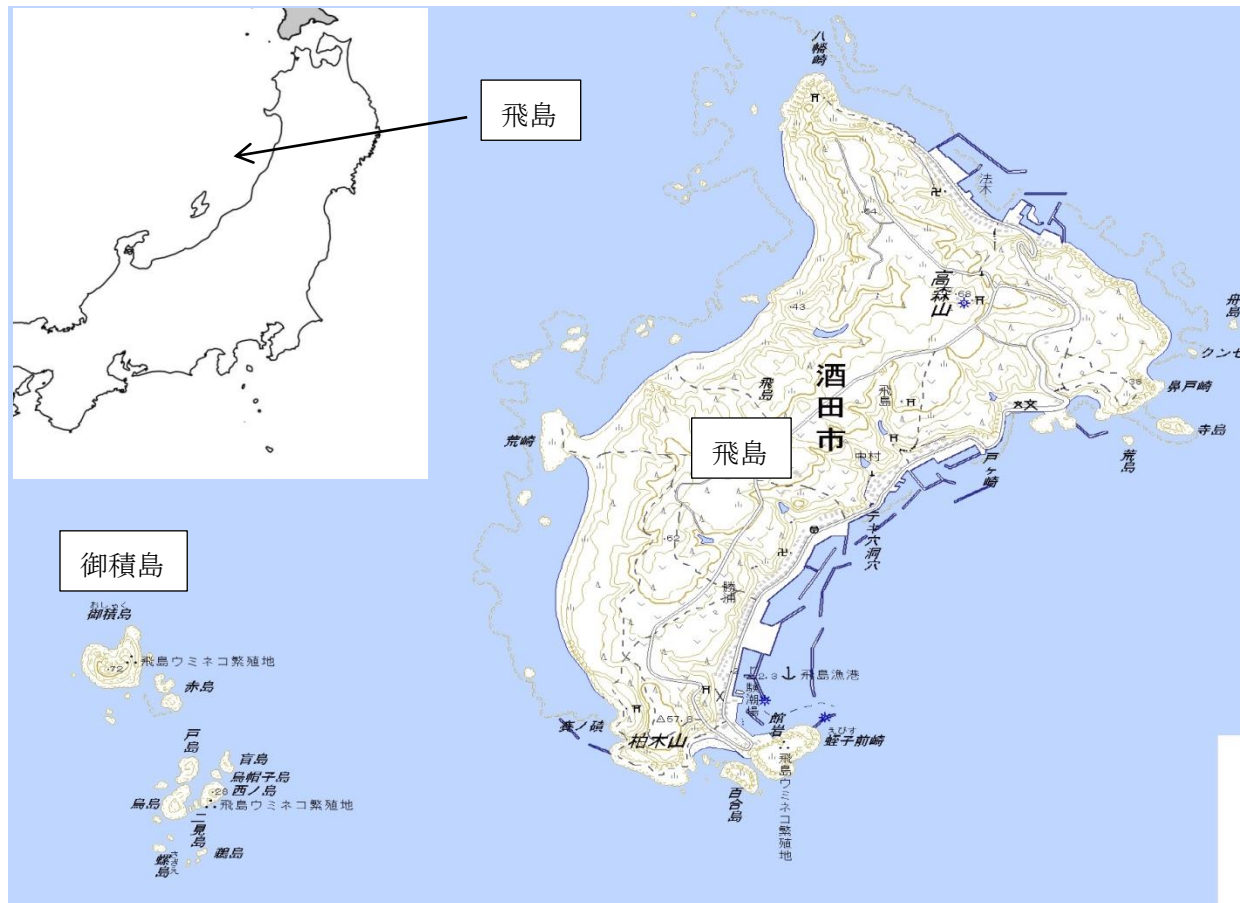


図1 飛島と御積島の位置

飛島の近くの鳥海山麓にある猛禽類保護センターにもイヌワシを専門とする同じく自然保護専門員の長船裕紀さんがいます。彼に聞いてみたところ、ウミスズメが繁殖してるかわからないとのことでした。ネットで検索してみると、ちょうどその頃にウミスズメが出ているようでした。飛島の西側に御積島という海から突き出た岩山があります（図1、2）。ここならウミスズメが

繁殖していてもおかしくありません。長船さんから「飛島に鳥の専門家は住んでいないが、日本野鳥の会山形県支部長の築川堅治氏が渡りの時期にしばらく滞在している」ことを教えてもらいました。ウミスズメは5月の連休くらいまでいるそうです。飛島は天売島よりだいぶ南なので、その時期にいるなら繁殖しているかもしれません。



図2 御積島

ケイマフリならまだしもウミスズメのこととなると話は別です。なにしろ日本でウミスズメの繁殖が確認されている場所は現在天売島だけなので、新たな繁殖地が発見されれば、嬉しいことです。現地に詳しい人が調査をやってくれば一番いいのですが、聞いてみると飛島で海鳥を専門に調査している人はいないそうです。御積島はモニタリングサイト 1000 の海鳥繁殖地に登録されているため、何年かに一度山階鳥類研究所が海鳥の繁殖調査に来ていますが、対象はウミネコとウミウです。ぜひウミスズメの調査にやってみたいと思いました。しかし、飛島はぼくの住んでいた羽幌から遠く簡単に行ける場所ではありません。御積島で調査をするのなら、あらかじめ船を探しておかないといけませんし、旅費・船賃などのお金がかかるので、資金が必要です。

2012 年から始めた天売島のウミスズメの調査は助成金による資金を得て行ってき

ました。ウミスズメは絶滅危惧種Ⅰa 類なので、助成金は比較的取りやすいと思います。ただ、地元ではないので、それまで助成金を申請していた北海道海鳥センター友の会から申請するのは難しいです。ぼくは2012-13 年と天売島でウミスズメの夜間海上センサスや巣探しを勉強するために、宮崎県のビロウ島にカンムリウミスズメの調査に参加させてもらっていました。これは「カンムリウミスズメ個体数調査チーム」という大槻都子さんが事務局長を務める日本海鳥グループの下部組織が助成金を利用してアメリカ人などの専門家と一緒にカンムリウミスズメの調査を行ってきたものです。大槻さんは飛島のある隣の福島県に住んでいましたので、同じ東北ですし、カンムリウミスズメの調査チームなので、近縁のウミスズメの調査をしても違和感はないと思いました。そこで、調査や手配はこちらでやるので、助成金を申請してくれないかと大槻さんをお願いしたところ、快く

引き受けてくれました。

次は船の手配です。船の手配は築川さんの協力を得ることができ、築川さんに紹介してもらった人に船を出してもらうことになりました。日程は悩んだ末、4月下旬から5月の連休の頃の1週間にしました。この時期はまだ海は荒れているので、移動を含めて1週間くらい余裕を持たないと行っても海に出ることすらできないかもしれません。ただこの時期は本業の天売のケイマフリの個体数がちょうど最大になる時期でしたので、ケイマフリ調査は飛島に行く前に終わらせるようにしました。

幸いなことに、無事に助成金を取ることができました。調査は自分と築川さん、先崎理之さん、長船さん、大槻さんで行うことにしました。うまく日程が合わなかったもので、それぞれ少しずつずらして行くことにしました。

北海道から飛島に行くには山形県の酒田というところから、フェリーで飛島にいかねければなりません。インターネットでどのように行くのが一番近いのか調べてみたところ、最短経路がなんと札幌から羽田に行って、また山形の酒田にある庄内に戻るというV字の経路でした。札幌から庄内へ直接行く飛行機はありませんでした。海がずっと荒れていて調査ができずに帰ってくることを防ぐために、飛行機は予定変更可能なものとししました。また助成金の取得が直前となったため、2路線購入する資金的余裕はありませんでした。しかし、仙台から行っても、秋田から行っても、新潟から行っても酒田は遠い場所でした。仕方がなく、札幌から秋田に飛ぶことにしました。秋田から酒田までJRで行きましたが、その時間は特急もなく、2時間も時折高校生でいっぱいになるロングシートの列車に揺られることになりました。羽幌を朝出発し

て、酒田に着く頃には夜になっていました。

■見つからないウミスズメ

2014年4月26日にいよいよ酒田港から飛島へ向かいました。飛島へ行く船は羽幌で言うとフェリーと高速船の合いの子のような感じでした(図3)。その日はべた凧で、オオミズナギドリ、ハイイロミズナギドリ、オオハム、ウミスズメ、カンムリウミスズメがいました。航路でウミスズメが出ていたので、島での繁殖が期待されました。



図3 フェリーとびしま

せっかくのべた凧の日だったので、飛島についてから日中にすぐに船に乗って御積島へ向かいました(図4)。御積島は海から突き出た切り立った岩山で、ウミスズメが繁殖していそうな環境でしたが、とても登れそうにありませんでした。島の一部に上陸できそうなところがあったので上陸しました。島の海岸の部分はあまり隙間のない岩盤で、洞窟みたいな場所もありました(図5)。岩の隙間に巣がないか調べましたが、見つかりませんでした。見上げると岩が積み重なった繁殖していそうな場所がありました。

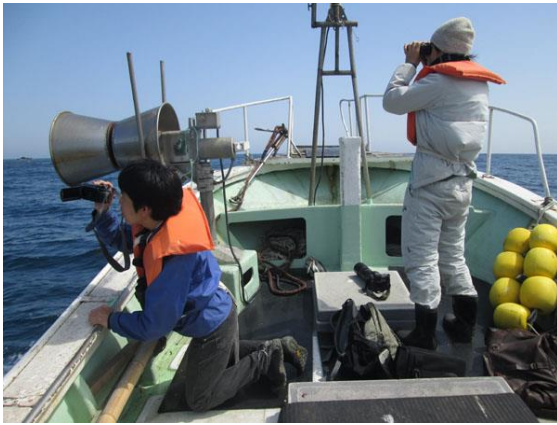


図4 調査船



図5 御積島の海岸部

夜になってから、いよいよ船で御積島のまわりを1周しました。ライトを使って探すとウミネコがたくさんいて、ウトウも1羽いましたが、小さい島であっというまに1周してしまいました。もう1周しましたが、ウミスズメは見つかりませんでした。

翌日は自転車で島をまわり、飛島の周りの海にウミスズメがいないか探しましたが、見つかりませんでした。「フェリーで渡って来たときは沖にたくさんいたのに…」もしかして、渡りだけなのだろうか？夜に船を出してもウミスズメはみつからず、昼間もみつからず、どうしたらいいのだろう。

■カンムリウミスズメを確認

そんなとき、先崎理之さんが遅れて飛島にやってきました。「ウミスズメは飛島に着くちょっと前にみました。」あわててみんな

で近くの高台に上って探してみると確かにウミスズメがいました。彼の情報によると飛島のまわりにカンムリウミスズメがいる場所があるそうです。その場所が見えるところにいってみると確かに沖合にカンムリウミスズメ6羽がいました。あらためて次の日に船に乗ってその場所に行ってみて探してみたところ、8羽を見つけました（図6）。日中に飛島のまわりになると、繁殖が期待されます。



図6 飛島周辺にいたカンムリウミスズメ

夜になってから、再び御積島にカンムリウミスズメを探しに行ってみました（図7）。今度はもう少し沖合を走り、調査方法にとられずひたすらカンムリウミスズメを探すことにしました。しばらくするとウミスズメのような鳴き声を聴きました。まもなく先崎さんがカンムリウミスズメを5羽みつけました。夜だと識別が難しいですが、近くまで寄ると確かにウミスズメではなく、カンムリウミスズメでした。



図7 夜の海上ライトセンサス

捕獲して抱卵斑があることがわかれば、この御積島で繁殖する成鳥であることが推定できます。しかし、天売島で使っていた早くて小回りのきく磯舟とは異なり、この船は大きな漁船で、追えども追えどもカンムリウミスズメに追いつくことができません。捕獲するにはもっと早くて小回りのきく小さい船が必要です。カンムリウミスズメを捕獲する場合、捕獲許可の他に、天然記念物なので、現状変更の許可申請も必要です。

ウミスズメ属の繁殖生態を考えると、夜に御積島の周りでカンムリウミスズメがいたことは繁殖している可能性が高いことを示唆しています。カンムリウミスズメの繁殖地の北限は石川県の七ッ島で、それより北の繁殖地は知られていません。もし、この御積島で繁殖していれば、繁殖地の北限が更新されることになります。

ウミスズメも飛島の近くで日中に1羽確認しました(図8)。夜に確認していませんが、繁殖期が異なる可能性があるので、カンムリウミスズメとウミスズメ両方が繁殖している可能性もなくはありません。韓国には両種が繁殖する島があります。今回の調査の発端となったケイマフリも繁殖していないようでしたが、1羽だけ観察するこ

とができました(図9)。築川さんによると飛島ではとても珍しいそうです。



図8 飛島周辺にいたウミスズメ



図9 飛島周辺にいたケイマフリ

■ウトウらしき巣穴

日中に御積島の周りで調査していたときに、御積島の上部に巣穴がたくさん見えました(図10)。それは天売島にあるようなウトウの集団繁殖地に見えました。そう言えば、飛島の周りでウトウをよく見かけていました(図11)。夜にもウトウを御積島の周りで見かけたので、ウトウが御積島で繁殖しているかもしれません。築川さんも近年ウトウをよくみかけているという話をしていました。ただし、その巣穴はオオミズナギドリのもの可能性があるので、確認が必要です。繁殖地に行くのが一番いいの

北の海鳥 4号

ですが登れないので、この調査の後に、築川さんや長船さんをお願いして夕暮れ時に飛島や船からウトウの帰巢の調査をしてもらっていました。残念ながらその後2年間の調査ではウトウの帰巢や餌運びは確認されていません。ただし、例えば礼文島の場合、暗くなってからウトウが帰巢するので、御積島も同様の可能性があります。国内のウトウの繁殖地の南限は宮城県の足島なので、御積島でウトウの繁殖が確認できれば、南から2番目になります。日本海側では「北の海鳥2号」の報告にあったように、青森県が南限ですので、それが更新されることになります。



図11 飛島周辺にいたウトウ（先崎理之撮影）



図10 御積島上部に見える巣穴

もし、御積島でカンムリウミスズメやウトウの繁殖が確認できれば、規模は小さいですが、御積島はこれまでわかっていたウミネコ、ウミウだけでなく、カンムリウミスズメ、ウトウの4種が繁殖する国内有数の海鳥繁殖地であることが明らかになりま

す。

2015年、2016年と築川さんが中心となって、御積島のカンムリウミスズメの調査を継続しています。今後も調査を継続し、繁殖が確認されることを期待します。

4. 海鳥ニュース

・カリフォルニア中部の海鳥 先崎理之（当会事務局長）

2016年1～9月にかけて、アメリカ・カリフォルニア州中部にあるサンルイスオビスポという小さな街に滞在しました。北緯36度と日本でいうと茨城県くらいの低緯度ですが、寒流であるカリフォルニア海

流の影響で沿岸部では夏場でもたくさんの海鳥が見られます。今回は、主に夏季に観察できた海鳥たちを紹介したいと思います。

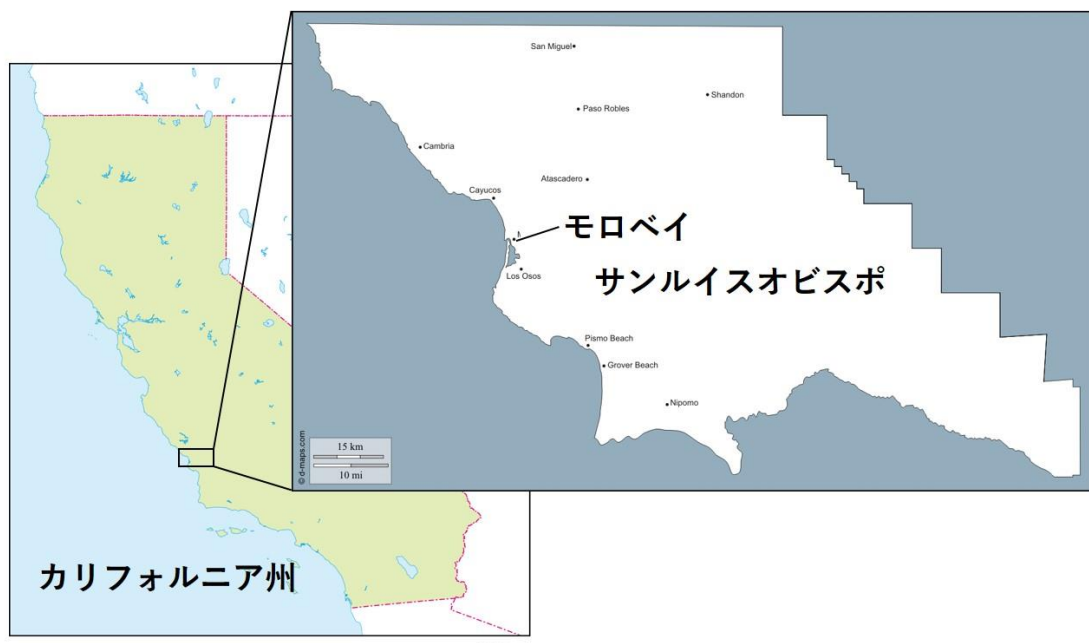


図1. サンルイスオビスポの地図。カリフォルニア州中部の小さな町

生活圏の繁殖種

私が住んでいたサンルイスオビスポの市街地は海辺より15km程内陸に位置し、複数ある港町には自転車や車で簡単にアクセスすることができます（図1）。そこで、滞在中は海鳥観察のためにモロベイという港町に頻繁に通いました（図1）。モロベイには、大きな砂嘴とその内部に広大な潟湖・モロ湾があり、驚くべきことに人間の生活圏内で複数種の海鳥が繁殖しています。例えば、ミミヒメウとアメリカシロペリカン

（写真1）のコロニーがモロ湾沿いの樹高30～40mの発達した常緑カシ類群落上に、アメリカオオセグロカモメのコロニーがモロ湾北部のモロロック（写真2）という大きな岩場上に、オグロカモメとカッシュクペリカンのコロニー（写真3）がモロ港先端のテトラポット上に見られました。

中でも驚かされたのは、比較的交通量の多い道路の街路樹にミミヒメウとアメリカシロペリカンのコロニーがあったことです。ミミヒメウのフンで真っ白になった道路で

は、「キュリキュリキュリ」という何とも言えないミミヒメウの雛の鳴き声が頭上で響き渡り、独特のにおいも漂っていましたが、巣の下に民家があるわけではないので苦情などはないのかもしれません。



写真1 アメリカシロペリカン コロニーの上空を飛ぶ

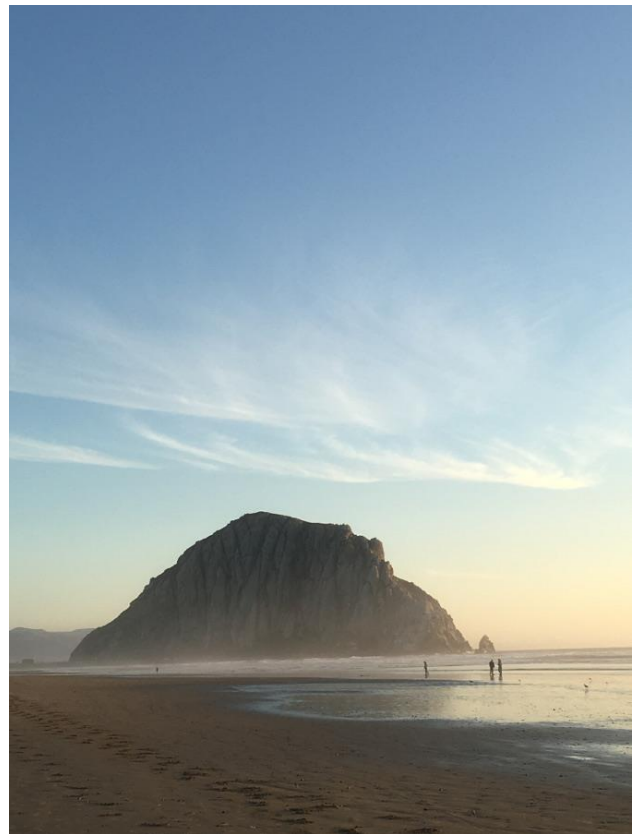


写真2 海岸にそびえたつモロロック



写真3 カッシュクペリカンとオグロカモメのコロニー

モロバイでは、以上の種以外の繁殖種は見られませんでした。ウミバトのコロニーがモロバイより十数キロ南側の切り立った断崖上にあり、砂嘴から海上を眺めていると、コロニーのほうにせっせと餌を運んでいる成鳥を多数みることができました。主に沿岸で底魚を捕っているようで、生態は近縁のケイマフリによく似ているようです。

豊富な非繁殖種

繁殖種以外では、少数のカリフォルニアカモメ（写真 4）とクロワカモメが砂浜上で毎回見られ、隣町ではボナパルトカモメも見ることができました。私は自他ともに認めるカモメウォッチャーですので、日本では大珍鳥のこれらの種には毎回興奮しっぱなしでした。中でも様々な年齢のカリフォルニアカモメは夏中みることができ、脚の色や羽の模様の変化を追えたのは大変な収穫でした。



写真 4 カリフォルニアカモメ アメリカ西海岸を代表するカモメの一種

また、カモメ類だけでなく、モロ湾内ではユウガアジサシ、アメリカオオアジサシ、オニアジサシ、メリケンアジサシが夏季を通して見られました。この地では珍鳥のクロハサミアジサシは残念ながら見逃してしまいましたが、繁殖後に集結したユウガアジサシの大群は壮観でした（写真 5）。近年、日本ではアメリカコアジサシが発見されており、ユウガアジサシやメリケンアジサシも今後日本で見つかるかもしれません。珍鳥派のバードウォッチャーはこれらの種に要注目でしょう。



写真 5 ユウガアジサシの群れ 日によって数千羽が見られた

盛りだくさんの海鳥クルーズ

以上では、陸から見られた海鳥たちを紹介してきましたが、ミズナギドリ類をはじめ、陸からは見るのが難しい海鳥を観察するには船に乗る必要があります。サンルイスオビスポでは、一般人向けのクルーズは開催されていません。しかし、知人の紹介のおかげで、モロベイから年に一度に開催される一日海鳥クルーズに乗ることができました。このクルーズは地元鳥類保護団体が秋季に開催しており、関係者に直接コンタクトをとる以外乗る術がありませんので、参加できたのは非常に幸運でした。

9月4日、待ちに待ったクルーズ当日です。日の出前の午前6時にはモロ港に着いている必要がありますが、参加する友人がいなかったため、4時過ぎに自宅より暗闇の中を自転車で現地へ向かいます。道中、メンフクロウやアメリカワシミミズクがそこかしこで鳴いています。6時15分、総勢35名が小さな漁船風の船（写真6）に乗り込み、いよいよ出港です。多少風があり海況はよくありませんが、まずは、南側の沖合にある浅堆を目指します。



写真6 モロ港に停船するクルーズ船

出港直後はカッシュクペリカンやオグロカモメなど沿岸性の種が中心でしたが、沖に向かうにつれてハイイロミズナギドリが増え始めます。中には、クロハラミズナギドリとシロハラアカアシミズナギドリ（写真7）も混じっています。気づけば、船はミズナギドリ類の大群に囲まれており、時折、トウゾクカモメやアオノドヒメウが出現します。余談ですがカリフォルニア沖ではオオミズナギドリがごくまれにみられるようで、今回も常連さんたちは血眼になって探していました（残念ながら見つからず）。しかし、順調な鳥の出とは裏腹に、波風が次第に強くなり、揺れやしぶきで観察が困難になってきました。残念ながら浅堆行きを断念し、今度は北上します。



写真7 シロハラアカアシミズナギドリ

幸運なことにこの北上が功を奏しました。波風は収まり、視界も良好になり鳥探しも俄然はかどります。すると、右舷遠方に黒い頭と白い次列風切が目立つカモメ類が目に入ります。クビワカモメの成鳥夏羽です！私がこの海鳥クルーズに乗りたかったのは、日本では近年記録がないこのクビワカモメを見るためだったと言っても過言ではありません。クビワカモメは北極海沿岸のツンドラ地帯で繁殖し、南半球の太平洋東部と大西洋東部にまで南下・越冬することが知られています。カリフォルニア沖では7月下旬から成鳥の南下群が見られだし、10月まで渡りが続くようです。その後クビワカモメは成鳥・幼鳥共に断続的に約10個体が見られました。

クビワカモメの興奮が冷めやらぬ中、今度は小さめのトウゾクカモメ類が次々に出現します。クロトウゾクカモメが多いものの、時折シロハラトウゾクカモメが混じっています。この2種の識別は若齢時には困難を極めますが、同時に見比べるとシロハラトウゾクカモメのほうが圧倒的に小さく、動きが俊敏であることが分かります。

トウゾクカモメ類に集中していると、今度は船が20頭ほどのザトウクジラの大群に囲まれていることに気が付きました（写真8）。マイルカ属の一種やカリフォルニアアシカも見られます。すると、オオトウゾクカモメ（写真9）とクロアシアホウドリが立て続けに出現します。間髪入れず主催者が、持参していた牛脂のかたまり？を海面に投げ込みます。彼らは普段から漁船から投棄された魚を食べているため、こうすることで目ざとい彼らが船の間近にやってくるのです。こうした試みは、いわゆる餌付けに近く、近年は日本ではその是非が盛んに議論されていますが、欧米の海鳥クルーズではごく一般的に行われています。



写真8 ザトウクジラ 天気の良い日には陸からも群れが見られた

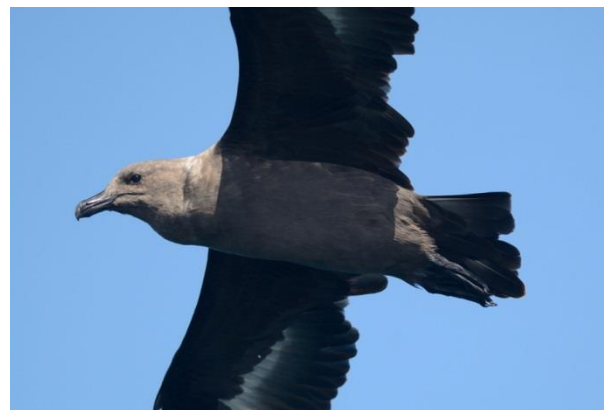


写真9 オオトウゾクカモメ 日本で見られる亜種と同じ

北の海鳥 4号

オオトウゾクカモメとクロアシアホウドリを見終えたところで、いよいよ港に引き返す時間となりました。数キロ沖合を陸に沿って港へ引き返します。その途中、今度は1～数羽のウミガラスが次々に出現します。どの個体も冬羽に近い見た目で、繁殖を終えてこの海域にやってきていたのかもしれませんが。同じ海域ではアメリカウミスズメらしきも1羽見られましたが、高波のためはっきりとは見ることは叶いませんでした。

16:15分、ぷかぷかと浮かぶラッコやテトラポット上のアライソシギを横目にモロ港に入港します。残念ながら可能性のあったウミツバメ類やセグロウミスズメ上種は見つけれませんでしたでしたが、数多くの

海鳥を間近に見られ、大変満足できるクルーズとなりました。モロベイの海鳥クルーズは、不定期開催のため今後参加することは難しいかもしれませんが、お隣・モンレーでは定期的に海鳥クルーズが開催されており、種数も豊富なようなのでまた訪れてみたいと考えています。

終わりに

カリフォルニアの海鳥、如何だったでしょうか？日本の海鳥をじっくり観察するのも面白いですが、たまには異国の地の海鳥を楽しむのも良いかもしれません。再度の機会に恵まれれば、これからも国外の海鳥について紹介していきたいと思います。

・1950年代の天売島(2) 赤岩のウミガラス

村田英二（聞き手：長谷部真）

1953年に天売島の教員になってから、海鳥繁殖期の休みの日は海鳥を見るために、黒崎から海岸線を歩いて、赤岩やシライソまで歩いて行きました。シライソから先は歩いて行けないので、市街地から古灯台まで登り、斜面から屏風岩の海鳥を観察しました。今の海鳥観察舎のあたりから、カブト岩の海鳥を観察していました。

1953-1960年に天売島に滞在していた間にウミガラスの数に大きな変化はなく、2-3万羽はいたと思います。ウミガラスは赤岩やその対岸にたくさんいました。シライソにかけての崖のところどころにもいて、屏風岩やその対岸にもいました。女郎子岩や兜沼、その対岸にもいましたが、その数は多くはありませんでした。それより西側にはいなかったと思います。1957年に国産初のペンタプリズム一眼レフカメラであるミランダ 55mm のカメラを購入し、1958年に羽幌のカメラ店で500mmのレンズを買いました。ウミガラスの写真を撮るために、手こぎ船を借りて赤岩に行きました。ウミガラスが使用している赤岩対岸繁殖地の斜面を登りました。現在はウミガラスの繁殖地はここだけですが（表紙写真、図13）、当時ウミガラスはどこにでもいました。でも、登攀装備なしでウミガラスのすぐそばに行ける場所は今も昔も変わらず、赤岩の対岸だけでした。とは言うても20mくらい斜面を登らなければならないので、当時も簡単に行けるところではありませんでした。現在ウミガラスが繁殖している穴にも入りました。今は装備なしでは危険に行けないようですが、当時は怖い

ですが、どうにか行くことができました。偶然にも、天売で最後に残ったウミガラスの繁殖地がここであることは今昔の想いです。

・写真で検証する1950年代の赤岩と対岸 長谷部真

村田英二さんのご自宅には1950年代の天売島の海鳥の写真などのフィルムが多く所蔵されていました。私はそれをお借りし、フィルムスキャナーでスキャンしました。ここでは、いくつかの貴重な写真を紹介したいと思います。

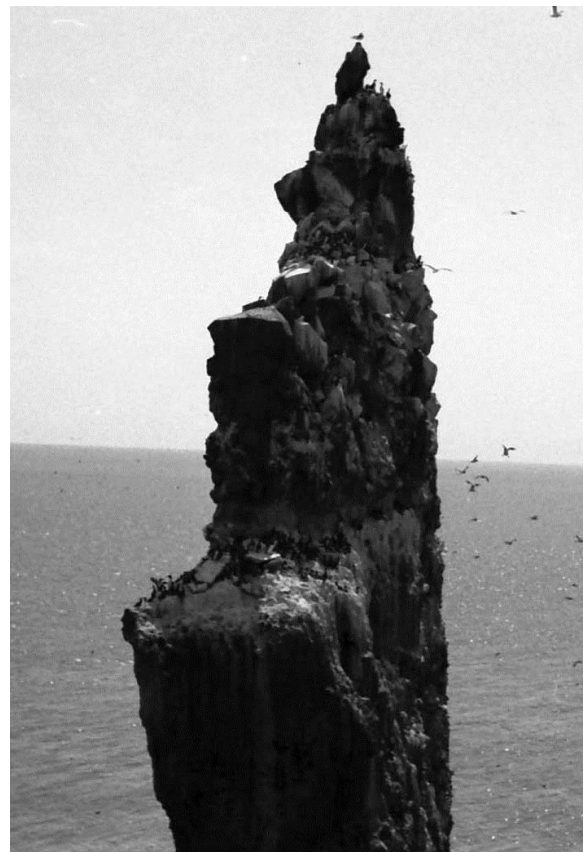


図1 赤岩対岸からの赤岩(1950年代)
村田英二 撮影

◆赤岩

天売島の象徴であるウミガラスがいた頃の赤岩の写真というのだいたい以下のような上から撮影した写真です（図1）。たくさ

北の海鳥 4号

んのウミガラスがいます。村田英二さんの写真の場合、上からの写真にとどまらず、海上や陸から実に様々な角度から様々な距離で撮影しています。これらの写真から赤岩のウミガラスの当時の個体数を概算できるほどです。

赤岩の西側の海上から撮ったモノクロ写真は、赤岩が今よりもずっと海鳥の糞で白

いことがわかります(図2)。右側の黒いぽつぽつはヒメウ、それより小さく横に列状に見えるのがウミガラスです。真ん中よりやや左側にも列をなしているのがわかります。

赤岩上部を見上げた画角です(図3)。横一列に幾筋にも並んでいるのがウミガラスです。

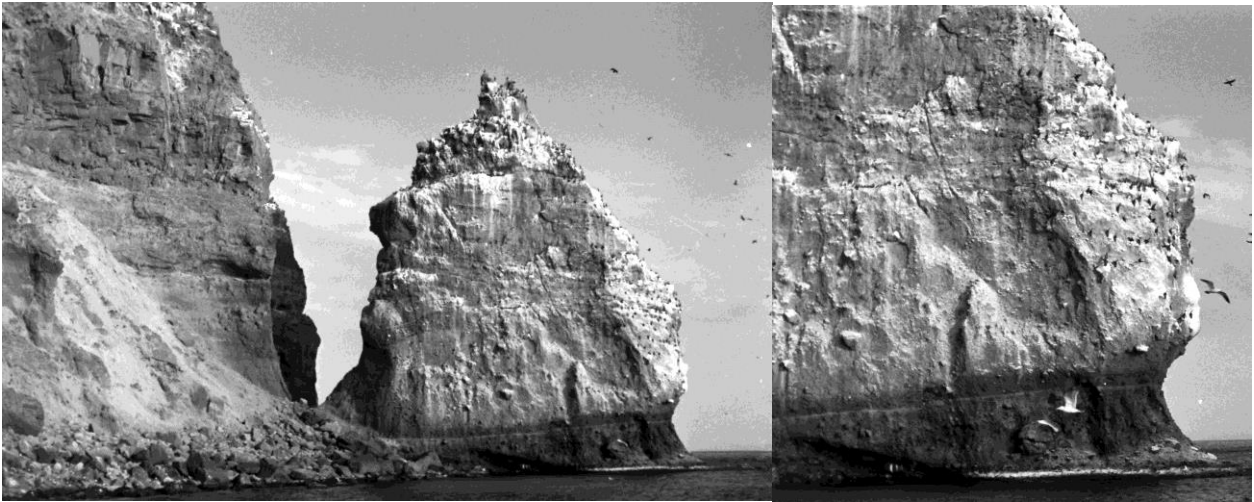


図2 西側から見た赤岩(1950年代) 村田英二 撮影



図3 西側から見た赤岩の上部(1950年代) 村田英二 撮影

海側から見た赤岩です(図4)。上部には黒い点のヒメウのそばにいる少し小さい白黒で

北の海鳥 4号

横に並んでいるのがウミガラスです。対岸の崖の白い部分にもウミガラスがいます。

東側から見た赤岩です(図5)。中腹の白くなった部分にびっしりとウミガラスが並んでいます。上部にもヒメウに混じってウミガラスもいるようです。左上の肩は赤岩を正面から見たところと同じ部分が見えています。

望遠レンズで撮影した赤岩海側の肩です(図6)。小さいウミガラスに混じって、ウミウ、ヒメウがいるのがわかります。

赤岩陸側の肩にもたくさんのウミガラスが見えます(図7)。赤岩の頂上付近にもウミガラスがいます(図8)。

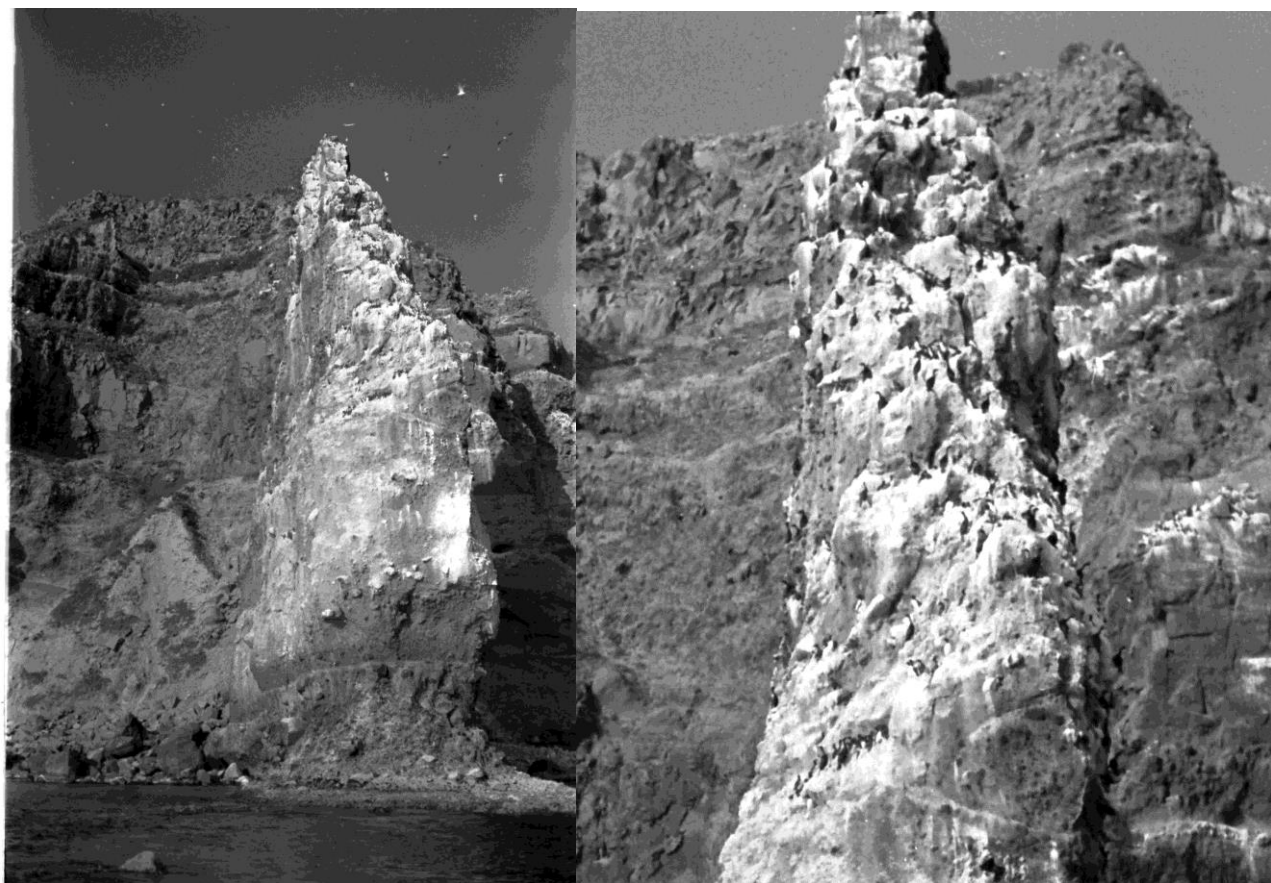


図4 海側から見た赤岩の上部(1950年代) 村田英二 撮影



図5 東側から見た赤岩（1950年代） 村田英二 撮影



図6 東側から見た赤岩 海側の肩(1950年代) 村田英二 撮影



図7 陸側から見た赤岩 陸側の肩(1950年代) 村田英二 撮影

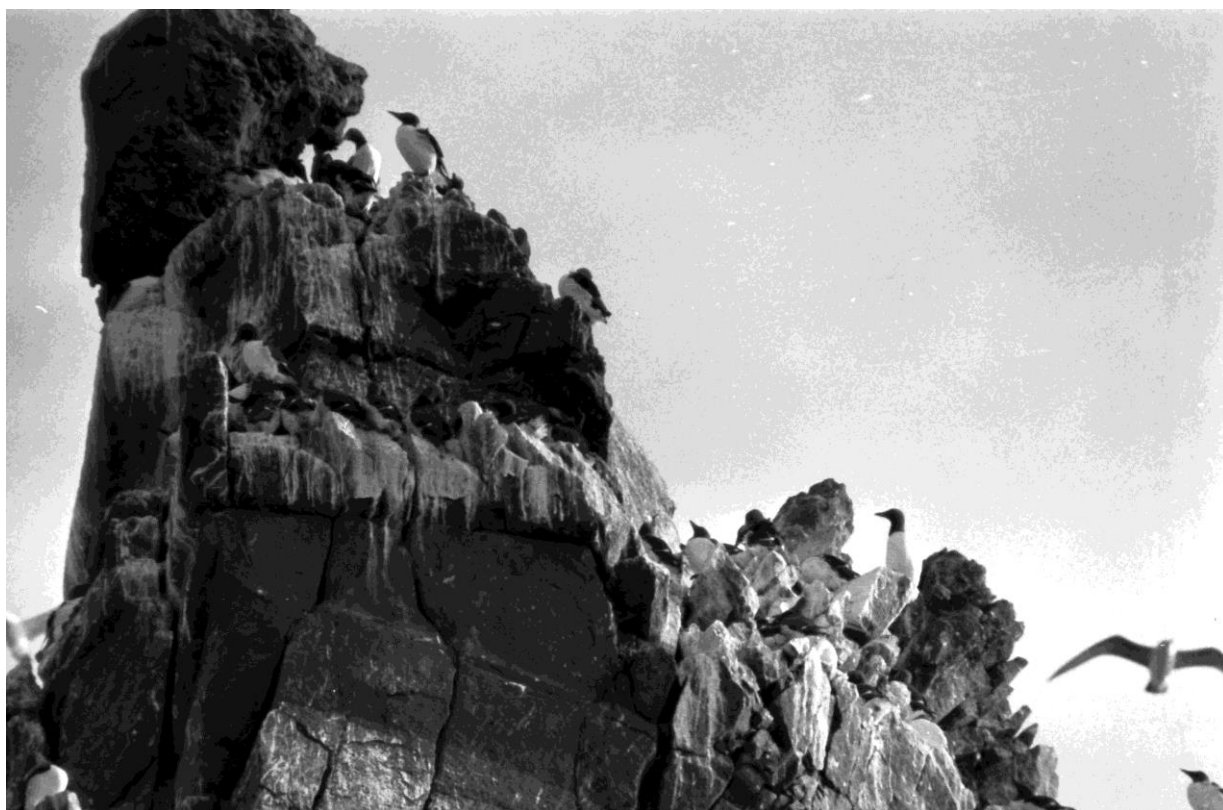


図8 陸側から見た赤岩 頂上付近 (1950年代) 村田英二 撮影

北の海鳥 4号

天売島には昔たくさんウミガラスがおり、その中で赤岩に最もたくさんいたと聞いています。しかし、どこにどれだけいたのかは、想像の世界を越えることはできませんでした。村田英二さんの写真は、まだ赤岩にウミガラスがたくさんいた頃にどの場所に繁殖していたか知る上での、貴重な客観的な記録です。残念なことに、現在赤岩にウミガラスは1羽も繁殖しておらず、当時の喧噪を見る影もありますが、写真を見ると「オロローン」と鳴き声が聞こえて来るようです。

◆赤岩対岸

赤岩対岸は現在、日本で唯一ウミガラスの繁殖している場所です。環境省が行っている保護増殖事業を進める上で、過去のウミガラスの繁殖記録は今後の目標を設定する上での重要な資料になります。

赤岩の対岸には高さ 120m の崖があり

ます(図9)。赤岩の正面には横に伸びたくぼみがあり、1950年代にはそのくぼみいっぱいにはたくさんのウミガラスが繁殖していたことがわかっています(図10)。

そのくぼみだけではありません。ひとつ上の横に白い線が延びた部分、またさらに上の崖の白い部分でも繁殖していました(図11)。

くぼみの東側から東側上部を見上げた写真です(図12)。ここでもウミガラスが繁殖していました。近年ではヒメウの巣がいくつもある程度の場所です。

くぼみの東側からくぼみ内を覗いた写真です(図13)。左側にたくさんのウミガラスがいるのがわかります。現在ウミガラスが繁殖しているのは右側のくぼみで、仕切りの石柱は中空になっています。右側のくぼみにはよくみると卵っぽいものと雛っぽい黒いのが見えるので、親鳥は驚いて飛去したと思います。



図9 沖から見た赤岩 と対岸 (1950年代) 村田英二 撮影



図 10 赤岩 と対岸 (1950 年代) 村田英二 撮影 くぼみがウミガラスの繁殖地

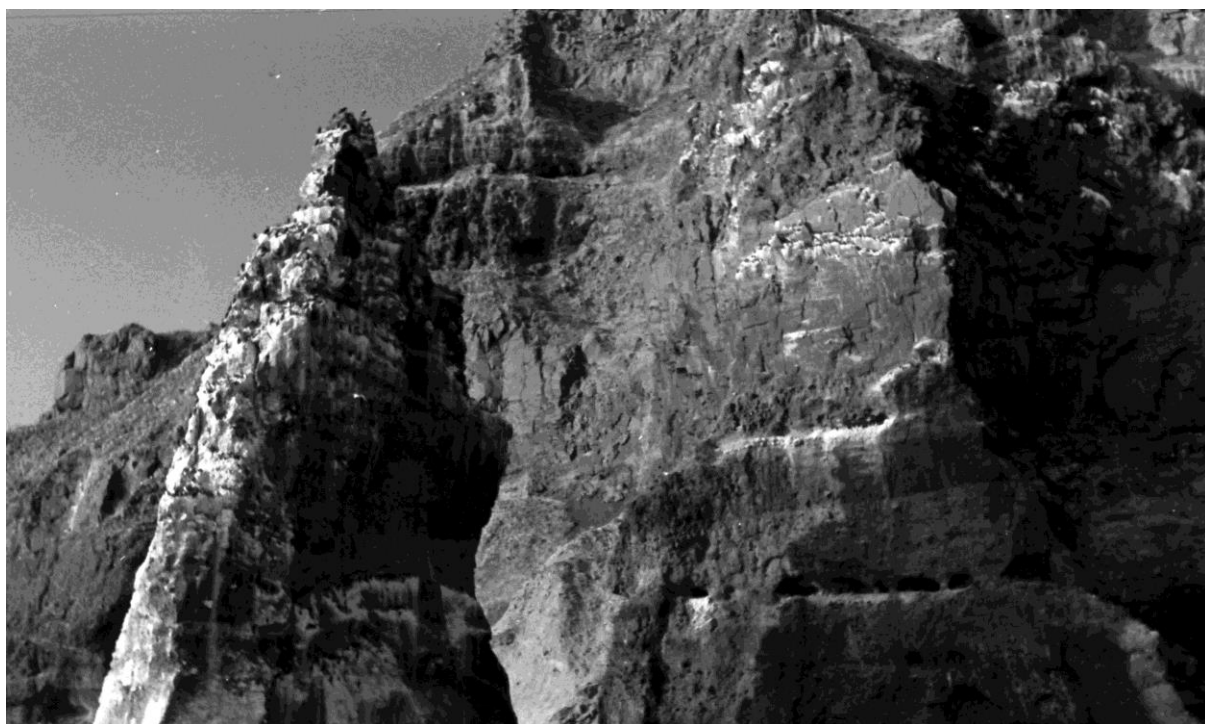


図 11 赤岩対岸上部 (1950 年代) 村田英二 撮影 くぼみの中やその上の白い部分、そのまた上の白い部分にたくさんのウミガラスがいる。



図 12 赤岩対岸東側上部 (1950 年代) 村田英二 撮影 真ん中の白い部分の上にウミガラスがいる。



図 13 赤岩対岸くぼみ内 (1950 年代) 村田英二 撮影 現在のウミガラスの繁殖地は右側のくぼみ

1950年代のウミガラスの繁殖状況を示す詳細な写真を残し、60年を経た今まで大事に残してくれていた村田氏に敬意を表します。とくに赤岩対岸のくぼみの様子は今後のウミガラスの保護増殖を考える上でとても重要です。村田さんの話によるとこれらの2つのくぼみだけで100羽はいた

そうです。このため、保護増殖事業ではここで100羽に回復することを第一目標としています。

赤岩や対岸以外にも屏風岩などの写真もあります。それらは次号で紹介しますので、お楽しみに。

・岩手県大槌湾におけるウミスズメの観察
伊藤元裕（東京大学大気海洋研究所国際
沿岸海洋研究センター）

ウミスズメ *Synthliboramphus antiquus* はウミスズメ科の海鳥です。体長 26cmほどで黒から灰色の背中と白いお腹が特徴です。ウミスズメ科は現存種 23 種に分けられており、ウミスズメより体の大きなウミガラス、嘴が鮮やかに赤いウミオウム、首が少し長くスマートなウミバトなどもこの仲間に入ります。この仲間は、その大きさや形態から陸にいる身近な鳥にちなんだ名前を多く与えられているのです。これらの体重は、コウミスズメの約 100g からハシブトウミガラスの 1 kg 強までバリエーションに富み、北半球全域にそれぞれ適応して大繁栄しています。その中では、今回ご紹介するウミスズメは、250g 程度と小～中型に位置する種となっています。このようにバリエーションが大きなウミスズメ科ですが、彼らは皆、翼を羽ばたいて飛ぶだけでなく、水に潜ることが出来るという共通点を持っており、最大で 45 秒間、水深 20m ほど潜水して小魚やオキアミ等を追いかけて捕食すると言われています。また、小さな翼を高頻度で連続的に羽ばたかせ、弾丸のように時速数十 km で水面すれすれを飛行することもできます。

ウミスズメは、全世界を見れば北太平洋に広く分布し、主に千島列島、アリューシャン列島、アラスカ西部、バンクーバー島、カリフォルニア周辺などの島嶼で比較的多くの個体が繁殖しています。しかし、日本では、環境省レッドリストに絶滅危惧 IA 類に指定されている鳥類で、北海道の天売島において 1957 年から断続的に繁殖が確認されている以外は、現在繁殖地は見

つかっていません。さらに、本州以南においては、これまで非繁殖期に本州から九州にかけての広い範囲の海上で冬季の観察例があるものの、繁殖期である 3 月から 5 月にかけての観察はほとんど報告されていないのが現状です。唯一、岩手県釜石市の沖合に位置する三貫島では、1971 年に本種の繁殖が確認された例がありますが、現在のところ、定期的に行われているモニタリング 1000 の調査においても親鳥の発見や繁殖の確認はなされていません。そんなウミスズメが、三貫島のすぐ近くにある岩手県大槌町の大槌湾内において、2016 年 3 月～6 月に多数、継続的に観察されたので、本稿で簡単に御紹介いたします。

観察は、2016 年 3 月から 6 月にかけて岩手県上閉伊郡大槌町の大槌湾において継続的に行いました。陸地から海を見渡し、スコープや双眼鏡で観察することで複数のウミスズメの飛来を確認しました。また、3 度、小型の船に乗船し、大槌湾全体の海上で目視センサスも行いました。



大槌湾のウミスズメ 2016/4/26

大槌湾では、ウミスズメは4月下旬に10羽程度が連続して観察され、5月下旬から急激に観察個体数が増え、観察は6月に入るまで続きました。観察個体の多くは、繁殖羽がはっきりしており成鳥のようでした。多くは、岸よりの極沿岸に分布していることが観察されており、群れを作ったの潜水行動も頻繁に見られたことから採餌をしていたと考えられました。また、時に混群を作っており、ハシブトウミガラス *Uria lomvia* やウミガラス *U. aalge*、カワウ *Phalacrocorax carbo*、ウトウ *Cerorhinca monocerata*、等に交じって潜水を繰り返す姿が観察されました。今回1度に観察されたウミスズメの最大数は、数百羽にも上り、実は、過去日本で一度に観察された本種の最大数を大きく上回るものでした。この2016年における観察結果が、例年起こっている現象なのか特異的な現象であるのかは現時点では分かっていません。しかし、地元の漁師の方の話では、数十年前からウミスズメは頻繁に春に観察されるということであり、以前から三陸沿岸に多数飛来していたことが示唆されます。



大槌湾のウミスズメ集団 2016/4/28

今回多数のウミスズメやその他海鳥が観察されたことは、津波のため大きな被害の出た岩手県の大槌湾に、その餌となる小魚類などが豊富に存在し、現在も希少種を含めた多くの海鳥にとっての重要な餌場となっていることを示しています。これは、大槌湾が今なお豊かな生態系を誇っている証に他なりません。

また、今回本種が観察された時期はちょうど繁殖期にあたるため、今後付近での繁殖地の発見も期待されます。日本で2例目の貴重な繁殖地が見つければ非常に喜ばしいことです。今後も、継続的な調査と詳細なデータを解析した論文の公開を予定しており、一連の発見を日本のウミスズメの現状把握に役立てられるように努めていきたいと考えています。

5. おしらせ

・助成金

2017年もサントリー世界愛鳥基金より助成金を得ることになりました。2016年に引き続きトド島におけるウトウの餌状況やヒナの体重の調査を行うほか、新たにデータロガーをウトウに装着し、採餌海域などを明らかにします。引き続き北海道大学水産学部の協力を得て行います。

・卒業論文の紹介

当研究会の道東地区を担当している矢萩樹さんが釧路公立大学（環境地理学）で卒業論文を発表しました。中身はこれまでも北の海鳥で紹介してきましたが、矢萩さんは釧路市でオオセグロカモメの営巣状況を調査し、人工物上の巣の糞による被害状況の聞き取り調査を行ってきました。これは、生態調査による自然科学的方法と被害や対策についての聞き取るという人文科学的方法の両面から行う、まさに地理学の研究方法です。通常であれば、ここで満足するところですが、それだけでなく、文献調査の対象を北海道全体や海外までに広げています。オオセグロカモメの人口巣に関する研究はこれまで国内では地域的な報告がちら

ほらとあった程度でした。この題材について広くまとめたのは日本でこの研究が初めてです。イギリスなどでは大型カモメの人工物上での営巣が社会問題に発展していますので、日本でも今後問題になる可能性が十分にあります。そのときには矢萩さんの卒業論文は重要な文献として引用されることでしょう。この卒業論文は北海道海鳥保全研究会のホームページからダウンロードできます。

<http://media.wix.com/ugd/76f137ce6834c0c2ad4ff9bff18fe1fb17cb7d.pdf>

・会報誌『北の海鳥』

この度は投稿をしていただきありがとうございました。今回は3号で休んでいた村田英二氏の昔の天売島の話を開くことができました。次号にも続きます。会報誌は年2回の発行ですので、次号は2017年の9-10月頃に発行する予定です。記事数が少ないので、記事を書いてくれる方を募集しています。内容は新しいものでも古いものでも構いませんので、今後も記事の寄稿をよろしくお願いします。ご連絡はh.seabirdconservationgroup@gmail.comまでお願いします。